1. 総説　漢字資料を通して見る中国史　石谷　慎　003
2. 図版　015
3. 漢字索引と略説　132
4. 作品目録　150

凡　例

・本図録は、黒川古文化研究所におけｔる第 126 回展観「漢字の象形―文字の賞玩」展（2021 年 10 月 16 日～ 11 月 28 日）の開催に伴って編集、発行した。ただし、展覧会の総目録としてではなく、より研究性の高い図録を目指して、掲載作品を絞って部分拡大を増やした。また、巻末には「漢字索引と略説」を付し、字書としての利用にも供せるよう意図した。
・第 126 回展観の展示作品のうち、すでに研究図録シリーズ 6『秦漢遺宝 器物に込めた願い』に掲載したものについては、本図録に重複して掲載することを避けた。ただし、研究図録シリーズ 2『中国鏡でめぐる神仙世界』に掲載した鏡のいくつかは、再撮影をしたうえで本図録にも掲載した。カメラに装着するデジタルパックが Phase One P45 から P65 に更新されたことに加え、文字に一定方向から光を当てるように配慮したためである。
・収録作品は、「骨・玉」（骨器・玉器）、「青銅」（青銅器・青銅鏡）、「焼物（土）」（瓦当・封泥）、「文房」、「書」に区別し、つめ（インデックス）を色分けした。
・収録作品は京都大学人文科学研究所（卜骨・卜甲）・泉屋博古館・黒川古文化研究所の所蔵に分かれるが、撮影はすべて深井純氏による。
・本図録の執筆・編集は研究員 石谷慎、デザインは柴千裕（ヨンハチデザイン）が担当した。

1．総説　漢字資料を通して見る中国史

石谷　慎

はじめに

日本では漢字を常用する。それが表意文字であることも知っている。しかし、普段つかっている漢字が実際にどのような事物を象り、いかなる状況をあらわした文字であるかを知る人は稀であろう。漢和辞典を引くと、「～に象り、…をあらわす」と説明があるが、多くの人にはその意味するところを理解できない。そのような事物や状況に触れる機会が少ないためである。

たとえば、漢字の「漢」は、「氵」と「莫」から出来ている。「莫」は「カン（han）」という音をあらわし、「氵」は水を意味する。ここでいう「水」は渭水や淮水などの川を意味する。つまり、「カン」と呼ばれた水＝「漢水」をあらわす漢字が「漢」である。「漢」という字が出来た当時、字を読める誰もが漢水を思い浮かべたに違いない。今の河南省と湖北省の間を南北に流れ、黄河と長江の流域を結ぶ漢水は、古代の中国人にとって字にするほどに身近で重要な川であった。しかし、現代の、それも漢水を見たこともない人には、ピンとこない。

漢字は、それを書いた人々や書かれた器物、すなわち人間とその製作物（人工物）とともに成熟してきたのだから、漢字の「表意」性を理解するためには、その字の成り立ちを知るだけでなく、それをとりまく文化や歴史にも通じていなければならない。とくに儒教や仏教といった思想・宗教、律令・科挙をはじめとする政治制度は、漢字の広がりとともにその影響を及ぼす範囲を拡大してきた歴史がある。そう言うと、多くの人は飛鳥・奈良時代に隋唐王朝から伝来した仏教や律令制を想像するだろう。しかし、実はそれ以前から、中国の歴代王朝においても同様の受容と選択がくり返されてきた。4 世紀以降、漢民族ではない胡族・蒙古族などの民族によって開かれた王朝は多く、その統治期間は想像以上に長いのである。

そこで本書では、漢字への理解を深めるために、二つの視点を提示する。ひとつは、殷代から漢代を中心とする先史から古代の中国における漢字の成り立ちと発展をたどる視点（「一 漢字の象形と表意」）、もうひとつは、漢字文化を必然に継承した王朝と、非漢民族でありながら漢字を選択的に受容した王朝の政治・思想・文化に迫る視点（「二 漢字の継承と賞玩」）である。まずは本書であつかう「漢字資料」についての説明から始め、それから二つの視点について、いくつかの項目に区切りながら解説していく。

■漢字資料

本書では、漢字の施された各種の資料を「漢字資料」と呼ぶことにする。「漢字」には、陶文・甲骨文・金文・小篆（篆文）・隷書・草書・行書・楷書などがあり、それらは土器（陶器）・骨器・青銅器・木竹簡・布帛・紙など様々な素材に施されている。つまり、漢字資料とは、漢字がどのような形で、何にあらわされたかを問題とする概念である。

漢字がどのような形であらわされるかについては、書体・字体・字形のいずれかを問題とすることが多い。一般に、書体とは、文字の体裁・書風・様式（Style）であり、字体とは、正体・俗体・略体など、書体内での違い（Face）を指す。字形は、文字の筆画上の差違（Construction）である。字形構造は、象

9. 卜骨　　黒川古文化研究所（殷 1203）

殷後期　第１期　　現長14.3cm　幅10.3cm

「丁酉卜、賓貞、□。己亥卜、賓□。庚子卜、□□□。丙午□、□□」

左下の卜辞はまず「丁酉」が刻まれ、次にその右の「己亥」、つづいて「丁酉」の左に「庚子」、「丙午」が順に刻まれた。
上部にも「小吉」「好」などと刻まれる。

26. 附耳有蓋蟠螭紋鼎　　黒川古文化研究所（銅 48）

春秋後期　　通高17.6cm　口径16.6cm

「鼎」は二つの耳と足のある器に象った字である。「貝」に省略されて「圜（円）」や「貞」の一部に用いられている。

36. 方格規矩四神紋鏡　　黒川古文化研究所（鏡 59）

唐（A.D.650）　　径18.5cm

銘　「永徽元年」
　　「光流素月　質稟玄精　澄空鑒水　照迥凝清　終古永固　瑩此心霊」
釈読「光は素月を流し、質は玄精を稟（う）し、空を澄まし水に鑒み、迥（はるか）を照らし清を凝らす。終固まで永固にして、此の心霊を瑩（すま）す」

第二句の「精」と第四句の「清」が平声庚韻で押韻し、第六句の「霊」は平声青韻で通韻する。

54. 方于魯 九子墨　　黒川古文化研究所（文 42）

清（倣明）　　長9.0cm　幅3.1cm

銘「九子」「壬午年海陽方于魯珍藏」

「九子」は明・楊慎（1488–1559）『升菴集』に「俗伝龍生九子、不成龍、各有所好」と紹介される「贔屭・螭吻・蒲牢・狴犴・饕餮・蚣蝮・睚眦・金猊（狻猊）・椒図（※異説あり）」で、明になりその具体像が議論され、図像としても流行した。兄弟それぞれに個性があるという意味に転じ、九人の子どもの姿にも描かれた。

3　漢字索引と略説

凡例

・漢字は五十音順（代表的な音読みのアイウエオ順）に並ぶ。
・左端の枠内には各漢字の古代の字形を示す。甲骨文字は◉、金文は◎、篆文は○印を付した。トレースは研究員の馬渕一輝が行い、石谷が校閲した。
・主項目の下には、その字が本書に登場する図版の番号とそこでの用例を示す。
　番号を（　）内に表示する場合は、漢字そのものではなく由来となった器物や紋様の図版を示す。
・〔成り立ち〕には、その漢字の成り立ち（解字）を説明する。その際、下記の字書類を参考とし、文中にはそれぞれの略称を表記した。
　『学研漢和大字典』学習研究社、1978 年［学研］
　『字統』（白川静著）、平凡社、1984 年［字統］
　『字源』天津戸籍出版社、2012 年［字源］
　『新字源』改訂新版、角川書店、2017 年［新字源］
　『漢字字形史小字典』（落合淳思著）、東方書店、2019 年［字形史］
・〈略説〉には、その漢字の成り立ちに関する諸説や関連する漢字、図版中にどのようにあらわれるかを解説した。参考にした文献は末尾にまとめ、文中には［黒川 2021］のように示した。

部首索引（画数順）

1【一】上（ジョウ）
【丨】中（チュウ）
【丶】之（シ）
【丿】事（ジ）
2【二】云（ウン）、亘（セン）
【人（亻）】人（ジン）、以（イ）、何（カ）、会（カイ）、侯（コウ）、今（コン）、作（サク）、仙（セン）、便（ベン）、保（ホ）、令（レイ）
【儿】光（コウ）
【八】公（コウ）
【凵】出（シュツ）
【刀】利（リ）
【勹】勿（ブツ）
【十】南（ナン）
【卜】卜（ボク）、貞（テイ）
【卩】印（イン）
【又】又（ユウ）、受（ジュ）
3【口】右（ウ）、吉（キチ）、君（クン）、后（コウ）、同（ドウ）
【囗】圓・円（エン）
【土】壺（コ）
【大】大（ダイ）、夫（フ）
【女】好（コウ）
【子】子（シ）、孫（ソン）
【宀】家（カ）、官（カン）、宜（ギ）、宗（シュウ）
【寸】尊（ソン）
【小】小（ショウ）
【尸】居（キョ）
【工】左（サ）、巫（フ）
【巾】帝（テイ）
【干】年（ネン）
【彳】従・從（ジュウ）、征（セイ）
4【心】心（シン）、恐（キョウ）、思（シ）
【戈】戈（カ）
【手】承（ショウ）
【斗】斗（ト）
【日】日（ニチ）、春（シュン）、旬（ジュン）、昭（ショウ）
【曰】曰（エツ）
【月】月（ゲツ）
【木】果（カ）、東（トウ）、本（ホン）
【毋】母（ボ）
【水（氵）】水（スイ）、永（エイ）、清（セイ）、法（ホウ）、流（リュウ）
【火（灬）】然（ゼン）、無（ム）
【爪（爫）】為（イ）、爵（シャク）
【父】父（フ）
【犬】獣（ジュウ）
【王】王（オウ）
5【玄】玄（ゲン）
【白】白（ハク）
【目】目（モク）
【石】硯（ケン）
【示】禍（カ）、神（シン）
【穴】空（クウ）
【立】立（リツ）、章（ショウ）
6【竹】筆（ヒツ）
【米】精（セイ）
【糸】終（シュウ）、絶（ゼツ）
【羊】美（ビ）
【羽】羽（ウ）
【自】自（ジ）
【至】至（シ）
【艸（艹）】華（カ）、若（ジャク）
【虍】虎（コ）
【衣】衣（イ）
【襾（覀）】西（セイ）
7【見】見（ケン）、親（シン）
【言】説（セツ）
【豆】豆（トウ）、豊（ホウ）
【貝】質（シツ）
【赤】赤（セキ）
【車】車（シャ）
【辵（辶）】造（ゾウ）
8【金】金（キン）、鏡（キョウ）
【長】長（チョウ）
【門】開（カイ）、關・関（カン）
【雨】雨（ウ）、雲（ウン）
【青（靑）】青・青（セイ）
10【高】高（コウ）
11【魚】魚（ギョ）
【鳥】鳳（ホウ）
【鹿】麗（レイ）
【亀】亀（キ）
12【黄】黄（コウ）
16【龍】龍（リュウ）

衣（イ／ころも・きぬ）　【衣】部
【図版１】→（合祭するの意）
〔成り立ち〕 衣服のえりもとの形に象る［新字源］。
〈略　説〉 上部が奥襟、下部が襟元をあわせた様子［字形史］。部首として衣服の状態・種類などに関する意をあらわす。偏としてつかわれる「衤」は隷書で縦長に書かれた形が起源であり、「礻」と形は近いが、成り立ちはまったく異なっている［落合 2019］。

爲・為（イ／なす・なる・ため・つくる）　【爪】部
【図版 34】→なる　【図版 40】→〜せられる
〔成り立ち〕 手で象の鼻をもつさまに象り、象を使役することから「なす」、仕事をする意［新字源］。
〈略　説〉 殷代の中国に象が生息していたことは象牙でつくられた骨器がものがたる。宮廟の造営に象を使役したことから宮室を「つくる」とする説もある［白川 1978］。「象」（→【図版 30】）は上部が長い鼻、下部が毛のある尾、左側に足のある「ぞう」の形。隷書に下部を四点にした「為」に近い形があり、楷書にも「爲」として残っている［落合 2019］。

以（イ／もって）　【人】部
【図版 30】→もって
〔成り立ち〕 鋤（すき）の形に象る［新字源］。手で道具を用いて仕事をするの意［学研］。
〈略　説〉 古字は「㠯」で「耜」の原字。「もって」の意味は假借。漢鏡の銘文（→【図版 30】）では「ゟ」の右に「人」の形がつながる。

印（イン／しるし）　【卩】部
【図版 48（考 552-e・577-o・577-p・577-d)】→イン
〔成り立ち〕「爪」と「卩」とから成り、手を下に向けてひざまずいた人をおさえつける意［新字源］。
〈略　説〉 甲骨文字の字形は「𠬝」。篆書で「爪」が上、「卩」が下と強調されるが、隷書の字形はむしろ甲骨文字に近い。印璽・押捺の意に用いるのは戦国時代以降である［字統］。

雨（ウ／あめ・あま）　【雨】部
【図版１・７右】→あめ
〔成り立ち〕 空から水滴が落ちてくるさまをあらわす［新字源］。
〈略　説〉 甲骨文字に見られる「冊」は天空から降ってくる様子、小点は雨粒をあらわす。殷代や西周時代には自然の降雨に頼った農耕がおこなわれていたため、雨に関する事柄が多く記録される［字形史］。部首として気象に関係する事柄をあらわす。

羽（ウ／は・はね）　【羽】部
（【図版 14・16・22・23・40】）
〔成り立ち〕 鳥の両翼を並べた形に象る［学研、新字源］。
〈略　説〉 鳥の羽毛とする説もあり［字源、字形史］、たしかに別に翼の形をあらわす「翌」（→【図版８上右】）がある。殷代骨器に見られる饕餮の身体に並ぶ「f」字形の羽は古く龍山文化に由来し、鬼神の表現と不可分の関係にあるとされる［林 1970］。同様の形は「亜長」戚（→【図版 22】）の茎部分にも見られる。部首として羽の状態や動作などに関する意をあらわす。

右（ウ・ユウ／みぎ・たすける）　【口】部
【図版 34】→ユウ（左右）　【図版 35・48（考 577-f)・59】→ウ（右尚方・右工室・右将軍）
〔成り立ち〕 自分の右手を見た形の「又」に器物の象形である「㠯(サイ)」を加えた形［字形史］。
〈略　説〉「又」と「口」とから成り、ことばで援助することから「たすける」の意とする説もあるが［新字源］、「口」は器物の象形とするのがよい。右に祝祷の器を持ち、左には呪具の「工」を持って神の所在をたずねた。金文で補佐の意味に用いられた例があり、後に手の左右をあらわすようになった［字統］。

4　作品目録

番号	名称	法量	時代	所蔵
骨・玉				
1	卜骨	現長 23.2cm、幅 11.3cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（3220）
2	卜甲	現長　6.1cm、幅　2.0cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0265）
	卜骨	現長　8.2cm、幅　6.1cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0932）
		現長　8.4cm、幅　4.7cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0970）
		現長　4.4cm、幅　3.1cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0985）
3	卜骨	現長 11.0cm、幅　6.9cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0738）
4	卜骨	現長 14.7cm、幅 12.0cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0763）
5	卜骨	現長 10.5cm、幅　7.8cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（0992）
6	卜骨	現長 13.6cm、幅　7.6cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（1641）
7	卜骨	現長　9.7cm、幅　3.9cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（1546）
		現長 13.0cm、幅　4.6cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（2386）
8	卜骨	現長　5.2cm、幅　3.6cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（1149）
		現長　4.6cm、幅　2.3cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（1774）
		現長　5.7cm、幅　3.9cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（1789）
		現長　8.0cm、幅　6.8cm	殷後期	京都大学人文科学研究所（2969）
9	卜骨	現長 14.3cm、幅 10.3cm	殷後期	
10	卜骨	現長　4.4cm、幅　2.9cm	殷後期	
		現長　4.3cm、幅　2.7cm	殷後期	
		現長　4.4cm、幅　2.8cm	殷後期	
		現長　3.3cm、幅　2.0cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 1203）
11	卜骨	現長　7.0cm、幅　3.3cm	殷後期	
		現長　7.2cm、幅　2.2cm	殷後期	
12	卜骨	現長 12.6cm、幅　2.6cm	殷後期	
13	卜骨	現長　7.1cm、幅　2.8cm	殷後期	
14	饕餮紋骨杯	現長 29.2・11.8・14.5cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 51-1・2・3）
15	饕餮紋骨杯	現長 17.0cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 52）
16	饕餮紋骨杯	現高 11.7cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 53）
17	夔龍紋骨柶	現長 15.6cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 61-e）
18	夔龍紋骨柶	現長 9.5・6.6cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 62-1a・1d）
19	骨龍頭笄	長 20.5cm	殷後期	黒川古文化研究所（殷 1201）
20	夔龍形佩玉	長　8.8cm	戦国	黒川古文化研究所（殷 77）
青銅				
21	蝉紋柄枓	残長 37.0cm	殷後期	黒川古文化研究所（銅 77）
	饕餮紋柄枓	長 18.3cm、杯部径 3.1cm	殷後期	黒川古文化研究所（銅 47）
22	「亜長」戚	長 20.3cm	殷後期	泉屋博古館
23	饕餮紋尊	通高 24.6cm、口径 17.5cm	殷後期	泉屋博古館（彝 56）
24	饕餮亀紋壺	通高 29.0cm、口径 14.7 × 10.9cm	殷後期	泉屋博古館（彝 73）
25	小克鼎	通高 45.7cm、口径 41.5cm	西周後期	黒川古文化研究所（銅 37）
	陶斎吉金続録		清（宣統元年：1909）	黒川古文化研究所（文・書 441）
26	附耳有蓋蟠螭紋鼎	通高 17.6cm、口径 16.6cm	春秋後期	黒川古文化研究所（銅 48）
27	環耳豆	通高 27.7cm、口径 19.3cm	戦国前期	泉屋博古館（彝 109）
28	獣面飾轄	長 10.0cm（一対）	西周前期	黒川古文化研究所（飾 35）
29	戈	長 19.0cm	春秋後期	黒川古文化研究所（殷 1119）
30	重圏銘帯鏡（双圏昭明鏡）	径 13.3cm	前漢中期～後期	泉屋博古館（M208）
31	連弧紋銘帯鏡（連弧紋清白鏡）	径 16.4cm	前漢中期～後期	泉屋博古館（M1）
32	連弧紋鏡（内行花紋鏡）	径 21.0cm	前漢末～新	泉屋博古館（M27）
33	神人車馬画像鏡	径 21.7cm	後漢中期	黒川古文化研究所（鏡 39）
34	獣首鏡	径 17.3cm	後漢後期	泉屋博古館（M141）
35	獣首鏡	径 16.7cm	魏（A.D.260）	黒川古文化研究所（鏡 44）
36	方格規矩四神紋鏡	径 18.5cm	唐（A.D.650）	黒川古文化研究所（鏡 59）
37	六狻猊紋鏡	径 19.3cm	隋～初唐	泉屋博古館（M59）
38	四神十二生肖紋鏡	径 17.0cm	隋	黒川古文化研究所（鏡 51）
39	四神十二支紋鏡	径 20.7cm	盛唐	泉屋博古館（M92）
40	伯牙弾琴紋鏡	径 22.4cm	中唐	黒川古文化研究所（鏡 65）
41	方格規矩紋鏡	径　8.7cm	元～明	黒川古文化研究所（鏡 72）
焼物（土）				
42	樹木獣禽紋半瓦当	長 15.3cm	戦国（斉）	黒川古文化研究所（瓦 1008）
	樹木蕨手紋半瓦当	長 16.9cm	戦国（斉）	黒川古文化研究所（瓦 1017）
43	樹木人物獣紋半瓦当	長 15.9cm	戦国（斉）	黒川古文化研究所（瓦 1013）
44	「永奉無疆」瓦当	径 17.3cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1045）
45	「関」瓦当	径 14.1cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1030）
46	「佐戈」瓦当	径 13.3cm	前漢	黒川古文化研究所（瓦 1034）
47	江徳量『秦漢瓦當文』		清（18 世紀後半）	黒川古文化研究所（文・書 406）
48	「鉅群太守章」封泥	縦 2.8cm、横 3.0cm、印面幅 2.2cm	前漢	黒川古文化研究所（考 577-s）
	「斉御府印」封泥	縦 3.5cm、横 2.7cm、印面幅 2.2cm	前漢	黒川古文化研究所（考 552-e）
	「巫令之印」封泥	縦 2.7cm、横 2.9cm、印面幅 2.0cm	漢	黒川古文化研究所（考 577-o）
	「成都左尉」封泥	縦 2.7cm、横 2.8cm、印面幅 2.1cm	漢	黒川古文化研究所（考 577-i）
	「中都丞印」封泥	縦 2.9cm、現横 2.1cm、印面幅 2.3cm	漢	黒川古文化研究所（考 577-p）
	「居室丞印」封泥	縦 2.8cm、横 2.7cm、印面現幅 2.0cm	前漢	黒川古文化研究所（考 577-d）
	「保宮左丞」封泥	現縦 2.4cm、現横 2.0cm、印面現幅 2.0cm	漢	黒川古文化研究所（考 577-w）
	「右工室丞」封泥	現縦 2.5cm、横 2.6cm、印面幅 2.0cm	漢	黒川古文化研究所（考 577-f）
文房				
49	彩画四直石硯	長 12.1cm、幅 7.6cm	宋	黒川古文化研究所（考 590 ／文 3053）
50	亀形陶硯	長 16.1cm、幅 10.6cm、高 4.5cm	宋	黒川古文化研究所（考 586）
51	虺龍紋陶硯	長 17.1cm、幅 12.1cm	清	黒川古文化研究所（考 589 ／文 3052）
52	瓦硯（「上林」）	径 16.0cm	清（瓦当は前漢）	黒川古文化研究所（瓦 1032）
53	呉鴻漸 百爵図墨	径　8.1cm	明	黒川古文化研究所（文 49）
54	方于魯 九子墨	長　9.0cm、幅 3.1cm	清（倣明）	黒川古文化研究所（文 42）
55	方于魯 木蘭墨	径　8.9cm	清（倣明）	黒川古文化研究所（文 44）
56	龍鳳紋筆	全長 21.9cm	明	黒川古文化研究所（文 30）
57	象牙蠅頭書百華詩筆	全長 21.9cm（一対）	清	黒川古文化研究所（文 37）
58	象牙刻画緑漆塗 帝王遊楽図筆筒	高 15.5cm	清（乾隆年）	黒川古文化研究所（文 132）
書				
59	集王聖教序	縦 27.5cm、横 15.0cm	北宋拓	黒川古文化研究所（書 029）